

## 研究コミュニティを活用した主体的学習を支援する 日本語会話入門教材の開発

その他（別言語等） のタイトル	Developing teaching materials which motivate active learning by way of promoting interactions in the learner ' s research community
著者	山路 奈保子, 因 京子, アブドゥハン 恭子
雑誌名	専門日本語教育学会研究討論会誌
巻	19
ページ	16-17
発行年	2017-03-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/00009203">http://hdl.handle.net/10258/00009203</a>

# 研究コミュニティを活用した 主体的学習を支援する日本語会話入門教材の開発

Developing teaching materials which motivate active learning by way of promoting interactions  
in the learner's research community

○山路 奈保子<sup>※1</sup> 因 京子<sup>※2</sup> アドゥハン 恭子<sup>※3</sup>  
YAMAJI, Naoko CHINAMI, Kyoko APDUHAN, Kyoko

キーワード：日本語会話入門、教室外環境、動機付け、主体的学習

Keywords: Japanese conversation for beginners, contacts outside classroom, motivation, active learning

## 1. はじめに

本研究は、学習者それぞれの環境の中で日本語を主体的に学習していくための動機付けに主眼を置いた日本語会話入門コース用教材の開発を行うものである。本研究が対象者として想定する学習者は、英語で研究活動を行う前提で来日した日本語学習歴のない研究留学生や外国人研究員であり、彼らは一般に日本語コースへの安定的出席や学習時間の確保が難しい一方で、研究室コミュニティにおいて日本語の話し言葉に日常的に接している。こうした環境条件を最大限に生かし、主体的学習の動機を維持するには、簡易な日本語表現を用いて周囲への働きかけを繰り返すことによって成功体験を重ね、周囲で話される日本語の中に学習した表現を見出すことをきっかけに日本語でのコミュニケーションに対する観察を促進することが有効であると考えた。本発表では、開発した教材の概要と授業実践およびコース終了後に実施したアンケート調査の結果を報告する。

## 2. 教材の概要

教材は8課からなり、各課は1) モデル会話、2) 基本表現(各課につき3項目)の解説および運用練習、3) その他モデル会話中に現れる有用な表現についての解説で構成される。各課のタイトル、モデル会話の場面、基本表現を表1に示す。教材開発に先立

って実施した『NIHONGO FUN & EASY: Survival Japanese Conversation for Beginners』(緒方由希子ほか著、アスク出版、2009)を用いた試行コースにおける授業観察とアンケート調査、インタビュー調査による対象者のニーズとコースへの評価を分析した結果(山路ほか2016)をもとに、導入する基本表現を取捨選択した上で必要と思われる表現を追加し、モデル会話はすべて新規に作成した。教室で口頭練習を行う基本表現は単純かつ汎用性の高いものに絞

表1 各課タイトル、モデル会話の場面、基本表現

1	<b>Getting to Know Each Other</b> 場面：学内で開催されたウェルカムパーティー 1. ワン・イーです。よろしくお願ひします。 2. お名前は？ 3. 留学生ですか？
2	<b>Talking about Foods (You Have to Avoid)</b> 場面：学内で開催されたウェルカムパーティー 1. 肉、だめなんです。2. しょうゆ、いらいますか？ 3. これ、おいしいですよ。
3	<b>Making Small Talk (1)</b> 場面：キャンパス内での立ち話 1. ここは買い物に不便です。2. 寒いです。 3. 中国の北のほうから来ました。
4	<b>Asking for Things You Need</b> 場面：研究室/レストラン 1. 定規、ありますか？ 2. トイレはどこですか？ 3. もうちょっと小さいの、ないですか？
5	<b>Placing Orders at Shops and Restaurants</b> 場面：コンビニ/コーヒーショップ 1. お箸、ご利用ですか？ 2. カフェラテ、2つお願ひします。3. 540円です。
6	<b>Making Small Talk (2)</b> 場面：キャンパス内での立ち話 1. きょうはいい天気ですね。2. 最近、研究はどうですか？ 3. 先生、厳しいですか？
7	<b>Asking for Consent or Permission before Doing Something</b> 場面：研究室 1. ここ、掃除したいんですけど… 2. あとでもいいですか？ 3. これ、ここに捨ててもいいですか？
8	<b>Talking about physical conditions</b> 場面：研究室 1. 歯が痛いんです。2. いつからですか？ 3. 歯医者、何時までですか？

<sup>※1</sup> 室蘭工業大学国際交流センター准教授

<sup>※2</sup> 日本赤十字九州国際看護大学看護学部教授

<sup>※3</sup> 九州工業大学教養教育院教授

表2 受講者の属性

	身分	出身	来日
A	博士後期課程	東南アジア	2016.4
B	博士後期課程	東南アジア	2016.10
C	博士後期課程	東アジア	2016.10
D	研究生	東南アジア	2016.10
E	交換留学生	東南アジア	2016.10
F	交換留学生	東南アジア	2016.10
G	研究員の家族	南アジア	2016.8
H	学生の家族	東アジア	2016.10

る一方で、モデル会話中には、試行コースで受講者から出された質問やコメントに基づき、会話機会と観察機会の増加につながると思われる数多くの表現を、一般に初級前半レベルでは取り上げられないものも含めて、提示した。

### 3. 教材試用の結果および考察

作成した教材は、2016年度後期に週2回行う初級前半コースにおいて初回から第5週までで使用した。第6週からは『日本語初級1大地』（スリーエーネットワーク）を用いた授業に移行した。すなわち、作成した教材による10回のコースが、初級文法の学習に入る前の導入となっている。研究活動が本格的になる前の来日直後の時期は比較的時間があるため、その期間に学習継続のための土台を形成しておくことを意図したものである。授業の様子は、全受講者の同意を得た上で音声のみを記録した。

受講者8名の属性を表2に示す。受講者Aは前期の初級コースに途中で出席できなくなり再履修を希望した。C、Dは来日前に独習、Eは第二外国語として履修経験があり、B、F、G、Hは未習であった。

授業では、学習した表現を使ってみた経験や耳にした表現について積極的にシェアするよう促した。例えば、初回授業で導入した挨拶表現に関連して、実際に誰が誰に、いつどのような挨拶をしていたか観察し第2回授業で報告することを課題とした。その結果、「実際に『お先に失礼します』と言っていた」「私の研修室では来た時も帰る時もすべて『お疲れさまです』だった」などの報告があった。以後も「(モデル会話中の)『すごい』」というのを研究室の学生が実際に言っていた」といった報告、「(モ

表3 「使用した表現」として挙げられたもの

<p>&lt;基本表現&gt;  「～、どこですか」(D、G、H)  「(いいえ、)大丈夫です」(D、G、H)  「(はい、)お願いします」(C、G)  「英語でもいいですか」(A)  「最近、研究はどうですか」(B)  「寒いですね」(C)  「牛肉、だめなんです。ベジタリアンで」(G)</p>
<p>&lt;モデル会話中の表現&gt;  「今、先生の部屋に行きます」(A)  「毎日、夜まで実験してます」(A)</p>

デル会話の)『ええと』と、『あのう』との違いは何か」といった教材中に提示された表現と学習者自身が耳にした表現との違いについての質問などが出され、周囲で用いられる日本語に対する観察意欲を高めることに一定の成果があったことが窺われた。

教材を使用した授業の終了時点で実施したアンケートでは、使用した/耳にした表現、日本語ができなくて困った経験、各課の評価、授業全体に対する評価と要望を尋ねた。使用した表現として具体的に挙げられたものを、挨拶表現を除いて表3に示す。

「基本表現」として口頭練習を行ったものだけでなく、1名ではあるがモデル会話中の表現をそのまま使ってみたという回答もあった。各課とも「Very helpful」または「helpful」と評価され、授業全体についても高く評価するコメントが寄せられ、開発した教材が一定の評価を得たことが示された。

### 4. おわりに

本実践での試みが実際に主体的学習の継続につながるかは現段階では明らかでない。今回の受講者のうちAとBは多忙のためその後の授業にはほとんど出席しておらず、こうした学習者でも日本語力の維持向上が可能かどうかも含め、長期的に観察を行っていく必要がある。(yamaji@mmm.muroran-it.ac.jp)

### 参考文献

- 1) 山路奈保子、因京子、アブドゥハン恭子：英語で研究活動を行う留学生・研究者のための「サバイバル日本語」—シラバス再構築に向けて—, 第18回専門日本語教育学会研究討論会誌, pp.30-31 (2016)